

# 過大規模校における家庭や地域と共に歩む学校づくり

著者	佐藤 佳彦
雑誌名	尚絅学院大学紀要
巻	(74)
ページ	77-93
発行年	2017-12-20
URL	<a href="http://doi.org/10.24511/00000340">http://doi.org/10.24511/00000340</a>

# 過大規模校における家庭や地域と共に歩む学校づくり

佐藤佳彦\*

Designing overcrowded schools to be deeply engaged with families and local communities

Yoshihiko Sato

少子化の影響等で全国的に学校の小規模化傾向が見られるようになり、学校規模の適正化を図るために学校の統廃合も進んでいる。その一方で、都市部では、マンション建設などにより人口が集積し、大規模化する学校も存在する。そうした大規模化する学校も、小規模校化する学校と同様に望ましい教育環境の整備に向けて模索し、対応している。

事例校である仙台市立新田小学校は、都市計画による宅地の造成とマンション建設により、平成15（2003）年からの10年間で児童数が倍増し、平成25（2013）年に1,000名を超える規模になった。児童数は増え続け、現在は学級数が31を超える「過大規模校」として位置付けられ、宮城県一の規模になっている。校長は、「過大規模校」の課題を押さえつつ、児童数に比べて施設・設備面が十分でない環境における教育活動の充実、地域課題をふまえた家庭や地域との連携・協働などにリーダーシップを発揮し、「家庭や地域と共に歩む学校づくり」を推進した。

キーワード：過大規模校、校長のリーダーシップ、学校づくり、  
地域コミュニティ形成の場としての学校、地域課題と学校

## はじめに

私は平成19・20（2007・2008）年度の2年間、児童数70名、全学年が単学級の小規模校である、栗原市立鳥矢崎小学校<sup>1)</sup>（以下、鳥矢崎小学校）に校長として勤務した。鳥矢崎小学校は、栗原市立学校の統廃合計画に基づいて平成25（2013）年3月に閉校<sup>2)</sup>、現在は他の2校と統合し、開校した栗駒小学校にその歴史は引き継がれている。

鳥矢崎小学校に勤務した後、宮城県教育委員会において指導主事として1年間、管理主事として2年間、「東日本大震災」の最大の被災地である気仙沼市と南三陸町を所管する南三陸教育事務所長として2年間勤務した。

平成26（2014）年度から平成28（2016）年度までの3年間は、仙台市立新田小学校<sup>3)</sup>（以下、新田小学校）の校長として学校経営に当たった。新田小学校は、児童数が1,100名を超える宮城県内一の大規模校である。

農村部と都市部の学校の違い、それぞれの地域性、小規模校と大規模校の違いはあっても、2校5年間の校長経験と通算5年間の行政経験から学んだことは、

---

2017年9月13日受理

\* 尚絅学院大学 教職課程センター 特別講師

○子どもは、学校、家庭、地域を生活の場、学びの場としている。教育が学校だけで行われるのではなく、家庭や地域も「教育の場」として機能することによって子どもは健全に成長していく。

○学校は地域住民にとって身近な公共施設であり、「地域コミュニティ形成の場」としての役割を求められている。

ということである。

また、被災地の学校となった鳥矢崎小学校で経験した平成20（2008）年6月の「岩手・宮城内陸地震」、そして平成23（2011）年3月の「東日本大震災」からは、

○学校は、子どもたちの防災に関する意識と能力を高めると共に、「地域防災」の観点から地域と一体となった防災教育の推進と体制づくりに力を注ぐことが必要である

ということも学んだ。

つまり、「学校の役割」の再確認であり、「家庭や地域と共に歩む学校づくり」の必要性和重要性である。

鳥矢崎小学校では、「教職員が、全校児童の顔と氏名を一致させることができる」という言わば小規模校の特長を生かしながら、目指す学校の姿と子どもの姿を保護者や地域住民とも共有しつつ、「家庭や地域と手を携え、共に歩む学校づくり」を推進することができた。

一方、新田小学校については学校規模が大きいことから、「家庭や地域と共に歩む学校づくり」に当たっては、教育環境の整備に様々な工夫と試みが必要な状況であり、「地域コミュニティ形成の場」としての学校の役割も吟味すべき課題であった。新田小学校の校長として、過大規模校における学校経営にどのように取り組んだかについて以下に記したい。

## I 校長のリーダーシップ

学力の向上、いじめ等の問題行動や不登校への対応、家庭や地域と連携した学校づくり、教職員の多忙感の解消と「子どもと向き合う時間」の確保、教職員の資質・能力の向上、教育技術や教育文化及び教育風土の継承など、「学校」はそのあり方の吟味と再認識を常に求められているように考える。

また、学校は、「社会に開かれた教育課程」・「主体的・対話的で深い学び」・「カリキュラム・マネジメント」などをキーワードとする教育課程の改善、それに伴う学習指導要領の改訂なども間近に控え、その対応も必要な状況である。

こうした中で、校長のリーダーシップの発揮が求められるのは、決められた事柄をどのように実行するかという「学校運営」ではない。リーダーシップの発揮が求められるのは、学校や地域の実態を踏まえ、問題を課題化して目標を設定し、目標管理や評価を進め、常に学校改善を図っていく「学校経営」においてであり、「組織マネジメント」においてである。

つまり、校長には、教育に関する確かな理念と識見をもって、学校や地域の状況と問題を把握し、組織的な学校経営によって学校改善を進めるリーダーシップが求められていると考える。

私が、組織的な学校経営によって学校改善を進める上で、特に重視したことは「家庭や地域と共に歩む学校づくり」である。「学校は意図的・計画的な教育の場である」ことを大前提としながら、「開かれた学校づくり」を推進し、家庭や地域と共に子どもを育てていくという視点で学校経営を行ってきた。

小規模校であった鳥矢崎小学校の場合、子どもや教職員は少なく、家庭や地域とも「顔が見える関係」が成り立ちやすいことから、「家庭や地域と共に歩む学校づくり」は紆余曲折があっても、その実現はスムーズであった。

しかし、過大規模校である新田小学校においては、それぞれの立場の思いがあってもそれを共有したり、「学校が地域を支え、地域が学校を支える」という関係を深めたりする上で、小規模校における経営よりも、校長として家庭や地域との連携・折衝を適切に行うリーダーシップ、組織的・機能的な学校経営を推進するリーダーシップがより重要であった。

## Ⅱ 過大規模校である仙台市立新田小学校の現状

### 1 過大規模校としての位置付け

新田小学校の近年の児童数・学級数・教職員数の推移は、以下の表の通りである。

表 仙台市立新田小学校の児童数・学級数・教職員数の推移

年度	H15	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28
児童数	535	871	894	921	977	1,033	1,098	1,128	1,148
学級数	20	29	26	29	29	31	32	34	35
職員数	38	53	64	64	62	64	70	71	73

※各年度とも、5月1日現在の数である。

※児童数、学級数には、特別支援学級を含む。

※職員数は、県費負担教職員と市費負担教職員の合計である。

仙台市教育委員会は、主に学校の小規模化に伴う望ましい教育環境の確保のために、平成20（2008）年8月に『仙台市立小・中学校の一定規模確保に向けた基本方針』及び『同実施方針』を策定した。

さらに平成27（2015）年7月には、『仙台市立小・中学校の一定規模確保に向けた方針及び過大規模校化への対応方針』<sup>4)</sup>を策定し、土地区画整理事業やマンション建設などに伴う学校の大規模化に対応して学校規模の適正化を図ることとした。

この中で、仙台市教育委員会は、特別支援学級数も含めて、

「学級数が25学級以上30学級以下の学校」は『大規模校』

「学級数が31学級以上の学校」は『過大規模校』

として位置付けた。

新田小学校は、平成21（2009）年度以降は『大規模校』、学級数が31を超えた平成25（2013）年度以降は『過大規模校』として位置付けられることになる。

## 2 学校の概要

### (1) 開校と学区の概要

新田小学校は、昭和41（1966）年4月1日に仙台市立東仙台小学校から分かれ、仙台市で40番目の小学校として誕生し、平成28（2016）年4月に開校50周年<sup>5)</sup>を迎えた。

学区は、ほぼ東西に走るJR東北本線とJR仙石線に挟まれた地域で、東は南北に走る仙台バイパスを境に田子地区、西は原町地区、南は卸町地区、北は東仙台地区、燕沢地区と接して

いる。仙台市の市街地と田園との境に位置していたが、特に平成15（2003）年以降、都市計画による宅地造成が急激に進んだ。

学区は、JR仙石線小鶴新田駅の開業と都市計画による宅地等の造成とマンション建設、さらには東北学院中学・高等学校の移転開校、仙台市新田東総合運動場<sup>6)</sup>（以下、元気フィールド仙台）の完成などに伴って人口が急増し、平成28（2016）年の学区内の人口は約16,000名、世帯数は約7,600戸に上っている。

それに伴い、新田小学校の規模も大きくなってきた。開校当時の昭和41（1966）年は児童数が516名で学級数は12学級だったが、平成28（2016）年5月1日現在では児童数が1,148名を数え、学級数は35学級となっている。

学校は、学区のほぼ中央に位置している。学区の西側地区は開校以来の学区であり、保護者には本校卒業生も多い。高齢化率が高いが、各町内会を中心とした結びつきが強い。学区の東側地区は新興地域でマンションが多く、西側地区に比べてやや若い世代が多い。各マンションの管理組合は組織されているが、地域活動を行う組織は少なく、地域への帰属性はやや低い。

保護者を含め、地域住民の学校に寄せる期待は大きく、協力的である。

## （2）校舎改築工事

児童数の増加に伴い、新田小学校では平成24・25（2012・2013）年度の2年間、校舎の改築工事が行われた。過大規模校の状態が続くことが見込まれるが、長期的には児童数が減少する見通しであること、及び通学区域の変更や分離新設による対応が困難であることから、改築に合わせて必要教室数を確保することとした。

校舎の改築工事期間中、子どもたちはJR仙石線小鶴新田駅前の仮校舎で学校生活を送った。平成26（2014）年4月に、収容可能児童数1,400名の鉄筋コンクリート造、地上5階建て（5階部分はプールと特別教室の一部、及び児童数増加の際の普通教室への転用スペース）の新校舎が完成し、従来の場所で教育活動を再開した。新校舎は、東日本大震災を教訓として、防災機能と災害発生時の避難所機能を十分に備えた構造となっている。

校庭の完成は、新校舎完成より1年以上遅れ、平成27（2015）年5月の竣工となった。

## Ⅲ 過大規模校としての課題

小規模校や適正規模の学校であれば、施設・設備の有効活用、家庭や地域と「顔が見える関係」の中での教育活動の展開が可能であるが、過大規模校である新田小学校の場合はこうした点は大きな課題であった。

また、学区内の人口が約16,000名からなる地域において、学校が「地域コミュニティ形成の場」として家庭や地域と連携し、どのような活動を展開していくのかという点についても大きな課題があった。

さらに、大規模であるがために希薄になりがちな、子どもたちの地域への愛着、地域の人々の営みへの共感をどのように育てていくかも課題であった。

上記のことをふまえ、過大規模校において、「家庭や地域と共に歩む学校づくり」を推進する上での課題を次の5点に整理した。

〔「家庭や地域と共に歩む学校づくり」を推進する上での5つの課題〕

- 1 児童数や学級数に比べて施設・設備面が十分でない環境において、いかに教育活動を充実させるか。
- 2 希薄になりがち子ども相互の関係、教職員と子どもの関係、教職員相互の関係を確かなものとして築くために、教職員にどんな構えをもたせるか。
- 3 学校の取組みをいかに発信し、保護者や地域の要望、意見などを学校経営にいかに反映させるか。
- 4 「地域コミュニティ形成の場」である学校は、地域の課題をどうとらえ、家庭や地域と共にどんな活動に取り組んでいくか。
- 5 地域の団体や関係機関との連携をどのように進めていくか。

#### Ⅳ 目指す学校像

校長として、「子どもあってこそその学校」ということを大前提とし、次頁の図のような学校経営構想を描いた。その上で、「家庭や地域と共に歩む学校づくり」を推進するにあたり、「期待できるだけの値打ち」、「努力した効果」などの意味がある『甲斐』という言葉をつまみ、「目指す学校像」を次のように設定した。

1 子どもにとって『学び甲斐』のある学校

一人一人の子どもが伸び伸びと過ごし、これからの時代を生き抜く上で必要な知・徳・体の力を確かに身に付けることができる学校

2 教職員にとって『働き甲斐』のある学校

一人一人の教職員が使命感に燃えて、子どもの姿に根差した授業や行事を創り出していくことができる学校

3 保護者や地域住民にとって『協力し甲斐』のある学校

保護者や地域の住民が、子どもや教職員の姿を通して愛着と期待をもつことができる学校

#### Ⅴ 過大規模校における「家庭や地域と共に歩む学校づくり」

学校・家庭・地域が連携する上で重要なことは、それぞれの教育的な役割と機能を共通にすることではなく、それぞれの役割と機能を再確認し、認め合う中で、子どものよりよい成長を目指すことであると考ええる。

そこで、学校・家庭・地域それぞれの教育的な役割と機能を次のようにとらえた。

○子どもが、「これからの時代を生き抜いていく上で必要な知・徳・体の基礎と基本を学ぶ場」である学校

- ・自ら学ぶ姿勢、思いやりとたくましさを培う学校
- ・教師と子ども、子ども相互の人間的なふれあいがある学校



図 仙台市立新田小学校『学校経営構想図』

学校づくりの基本方針 ～ 『傾聴』の構えと『対話』の重視 ～

仙台市立新田小学校 学校教育目標  
『心豊かでたくましく、学びを求め続ける子どもの育成』



- 子どもが、「人間としての温かみにふれて、生き方を学ぶ場」である家庭
  - ・家族相互で大切にし合い、交流がある家庭
  - ・家族で地域活動に参加する家庭

- 子どもが、「体験を豊かに広げて、望ましい社会性を培う場」である地域
  - ・地域の魅力を感じさせる人的・物的素材、営みを提供する地域
  - ・子どもの健全な成長を願う地域

その上で、過大規模校における「家庭や地域と共に歩む学校づくり」を推進する上での5つの課題に取り組んだ。

## 1 児童数や学級数に比べて施設・設備面が十分でない環境において、いかに教育活動を充実させるか。

平成24年(2012)年4月から2年間、過大規模校化に対応するための校舎改築工事に伴って、約1,000名の子どもたちは本来の学校の場所から約1km離れたJR仙石線小鶴新田駅東側に建てられた仮校舎(プレハブ校舎)での生活を余儀なくされた。

仮校舎には校庭がなく、子どもたちは休み時間や体育の時間を利用した体を動かす機会には十分には恵まれず、運動不足が懸念される状況であった。そのため、仮校舎から北に約400m離れた元気フィールド仙台の施設を借用して体育の授業の一部を行ったり、卒業式や学芸会などの行事を実施したりしてきた。

新校舎が完成し、移転してからも、児童数のさらなる増加、トラック1周140mしか確保できない校庭の狭さなどがあり、子どもたちの時間的・空間的なゆとり、そして仲間とのかかわりなどといった面で、学校経営上の工夫が必要となった。そこで、次のような対応を取った。

### (1) 特別教室、校庭や体育館使用割り当ての工夫

#### ①特別教室使用割り当ての工夫

理科室、音楽室、図工室、家庭科室などは各2教室あることから、過大規模校であってもそれらを活用した授業が効果的になされた。

しかし、一つしかない図書室は、週当たりの授業が28コマであるのに対し、学級数が31を超える本校においては、各学級が週当たり1コマ行う図書室利用指導ができない現状である。

そこで、図書室使用割り当てを学年単位とし、担任と図書事務職員(仙台市教育委員会非常勤嘱託職員2名)との連携による2学級同時利用や、学期や年度のスパンでの利用割り当てなどの工夫により、年35時間の利用指導時数を確保した。

#### ②校庭や体育館使用割り当ての工夫

体育館、校庭共に、授業1コマ当たり同学年2学級使用の割り当てとした。原則2学級は別々に授業を行うが、同学年割り当てとしていることから、单元によっては合同体育を行った。

また、子どもの運動量の確保の観点から、業間と昼休みの時間帯は校庭、体育館、5階普通教室転用スペースをローテーションで各学年に割り当てた。業前と放課後の時間帯は、校庭のみをフリーで子どもたちに利用させた。



## (2) 元気フィールド仙台や、地域の公園などの活用

### ①元気フィールド仙台との連携による体育的行事の実施

仮校舎の時期、体育的行事の「運動会」は特例として元気フィールド仙台内にある仙台市民球場で行っていたが、新校舎完成後は校庭も整備されたため、仙台市民球場の利用は認められなくなった。

しかし、児童数に比べて校庭が狭いこと、児童と運動会を参観する保護者や地域住民の数の総計が 3,000 名を超えることが予想された。そのため、校庭では行事の開催自体が難しいこと、開催の場合には安全管理に大きな問題が生じてくることなどから、学校、新田小学校父母教師会、新田学区連合町内会が関係機関に粘り強く働きかけた。併せて、元気フィールド仙台からは、「3,000 名を超える参加が見込まれる運動会は、地域スポーツの振興という観点からも従来通り元気フィールド仙台での開催が必要である」旨の意見を提出していただいた。

その結果、関係機関の理解が得られ、特例ではなく、元気フィールド仙台との共催行事という扱いで、引き続き仙台市民球場で「運動会」を実施できることとなった。学校行事が、地域のスポーツ振興に寄与する行事としても位置付けられたことになる。

「運動会」の他にも、約 10 年ぶりに復活した「持久走大会」やクラブ活動の「陸上クラブ」も、地域スポーツの振興という観点から元気フィールド仙台で実施している。

### ②新田学区連合町内会との連携による地域の公園の活用

4 年生以上の子どもたちが対象のクラブ活動<sup>7)</sup>も、児童数の増加に伴って約 600 名の子どもが参加することになり、学校施設だけでの実施が難しい状況となった。

クラブ数の精選も試みたが、「子どもの自発的な組織づくりと活動を重視する」というクラブ活動のねらいがあることから、元気フィールド仙台に加え、さらに他にも活動場所を確保することが必要になった。

そこで、クラブ活動実施に当たっての現状と課題を新田学区連合町内会長に相談し、学校の南西約 300m の場所に位置する新田公園を借用できるようにした。ゲートボールクラブなどが新田公園で活動することとなったが、地域の高齢者で組織するゲートボール協会が児童の指導に当たってくださるなどの副次的な効果も見られた。

また、火災時の第二次避難場所としても新田公園を利用することにした。校庭が手狭であるため、火災発生時に、

○校庭に第一次避難をしても、1,100 名を超える子どもの安全が十分に確保できるか。

○校庭に避難をされていて、消火活動の妨げにならないか。

などといった点が懸念されることから、全校児童が複数ルートに分かれて短時間で避難できる新田公園を「地域防災」の観点からも第二次避難場所とした。

## 2 希薄になりがちな子ども相互の関係、教職員と子どもの関係、教職員相互の関係を確かなものとして築くために、教職員にどんな構えをもたせるか。

過大規模校であるがために、子どもにとって個と集団のかかわりが希薄化しがちなこと、全教職員による子ども一人一人の把握が難しさを増すこと、教職員相互の連絡調整が不十分になりがちなことが懸念された。

そこで、次のような対応を取った。

### (1) 集団への子どもの所属感を深める活動の充実

学級活動における「話し合いの活動」を充実させ、話し合いに基づく実践活動を経験させ、集団への所属感を深めることを重視した。

また、学年・学級での活動やたてわり活動を充実させ、教職員と子ども、子ども相互の人間的な触れ合いを図り、思いやりの心を育てることに努めた。毎週月曜日を5校時限として放課後を『クラスの日』（会議を設定せず、担任と子どもが語り合ったり遊んだり、個別指導を行ったりする時間）としたり、隔週木曜日の業前の時間帯を『愛校日』（学級ごとに校内の美化活動、整理整頓に協力して取り組む時間）としたりすることなどを試みた。

### (2) 子ども一人一人の教育的ニーズに応じた支援の充実

校内は元より、校外での子どもの実態把握にも努め、児童支援教諭や特別支援教育コーディネーターを中心とした生徒指導や教育相談態勢の充実を図り、家庭や必要に応じて専門機関とも連携しながら子ども一人一人に応じた指導、支援に努めた。

また、配慮を要する子どもの情報と指導・支援の方向に関する認識を共有するため、学年ごとに校長・教頭などによるヒアリングを行った。

さらに、担任と保護者との個人面談や教育相談に加え、年度始めには必要に応じて校長・教頭も同席して、該当児童の新旧担任と保護者との面談を実施し、子どもへの指導・支援の方向について確認し合った。

### (3) 「傾聴」と「対話」を重視すること

学校経営の基本姿勢として、これまでも『「傾聴」の構えと「対話」の重視』を掲げてきた。学校教育の主体は子どもであること、学校教育は教職員だけで担い、完結するものではないこと、保護者や地域住民は子どもの教育を担う大切なパートナーであることなどからである。

子どもが『学び甲斐』を感じるためには、教職員との単なる言葉のやり取りでは十分ではない。教職員の子どもの見つめる眼差し、子どもの様子から子どもが訴えようとしていることを察する力量を高めることである。

そのためには、教職員からの一方的な伝達ではなく、子どもの発していることへの傾聴と、共に考える対話が重要であることを繰り返し全教職員で確認してきた。

また、一人一人の子どもの努力と進歩の様子を確かに「みる」目を養うよう、学校生活の様々な場面での児童理解や、学習心理学に基づく授業づくりに関する研修も深めた。

## 3 学校の取組みをいかに発信し、保護者や地域の要望、意見などを学校経営にいかに反映させるか。

児童数の増加に伴い、保護者の教育活動に対する見方・考え方も多様化してきている。さらに、「児童数が多い学校だから、何か意見や要望を言っても聞き流される」といった誤解が保護者や地域住民に生まれてくることが懸念された。そこで、次のような対応を取った。

### (1) 校長の経営方針と理念、及び教育活動の発信

#### ①学校だより『新田の子』を通じた発信

従来、行事予定を中心とした内容で月1回発行していた学校だよりを大幅に改善した。子どもを取り巻く環境の変化の中で、「いじめ」をはじめとして様々な問題が生じてきており、その対応、解決に当たっては、学校の取り組みと姿勢を明確に示した上で家庭・地域と連携することが必要不可欠だからである。

そこで、日々の学校ホームページ<sup>8)</sup>の更新・充実と併せ、学校だより『新田の子』<sup>9)</sup>(A4判サイズ、両面)を月2回発行し、校長の経営方針や理念を各教育活動の展開と関連付けて紹介するなど、「今、学校は何を考え、どんな方向に子どもたちを導こうとしているのか」「地域の学校として、どんな役割を果たそうとしているのか」などについて、積極的に発信した。発信した内容については、折にふれて、様々な場においても話題とするようにした。

併せて、学年だよりや学級だよりも、内容を単なる連絡で終わらず、学年主任としての、あるいは担任としての姿勢と方向性を具体的に打ち出すよう助言した。

## ②個人面談などを活用した全教職員による保護者の「声」の収集

夏季休業中の個人面談、12月の教育相談の際には、ほとんどの保護者が来校し、子どもの成長ぶりについて担任と話し合う。その折、担任は必ず保護者に「学校への意見・要望」を尋ね、その内容については学校全体で共有するようにした。共有された意見・要望は、学校改善に当たっての指標とした。

さらに、個人面談や教育相談の期間、及び授業参観日などには、保護者の希望があれば校長、教頭、主幹教諭、教務主任、養護教諭などの担任以外の教職員も保護者と面談し、保護者の「声」、意見・要望に耳を傾けている。この取り組みを通じて、

○保護者が特定の期間だけでなく、日常的に率直な「声」を届けるという雰囲気

○担任は勿論、校長以下のどの教職員に相談してもよいという保護者の理解ができてきている。

## ③教職員と保護者、地域社会との積極的なかわり

保護者や地域住民が来校するだけでなく、教職員が積極的に地域に足を運ぶ機会を重視した。

従来から、子どもの生活する環境の理解をねらいとする「家庭訪問」を年度始めに実施してきている。それに加えて、子どもの通学実態の把握、及び保護者や地域との情報の共有をねらいに毎月第2金曜日を『地域の日』とした。

『地域の日』では、教職員が子どもと一緒に下校しながら通学路の様子や下校の実態を把握すると共に、各町内会長宅、学区内の関係施設や商店等を訪問したり、道行く保護者と立ち話をしたりする中で、子どもに関する情報を共有するなどした。

『地域の日』の取り組みなどを通じて、地域の情報もより具体的に学校が共有できるようになり、学校と地域の「顔が見える関係づくり」に役立った。休日に行われる地域行事に本校ブラスバンド部が出演して演奏したり、校長は元より教職員が参加したりすることも増え、そのことが行事に参加している子どもの励みにもなり、地域や保護者からの信頼を高めることにもつながっていった。

## (2) 学校評価の充実

### ①協働型学校評価の推進

仙台市立の学校では『協働型学校評価』<sup>10)</sup>を実施している。

『協働型学校評価』は、学校・家庭・地域の三者が子どもたちの現状・課題から重点目標を設定し、それぞれの立場から協働(複数の主体が、相互の自主性・主体性を尊重し、理解し合い、役割・責任分担しながら、共通の目的・目標に向かって連携・協力し、相乗効果を上げていくこと)として、子どもたちのよりよい姿を実現するための活動を行うことにねらいがある。

新田小学校では、『協働型学校評価』の重点目標として「あいさつ」・「読書」・「清掃」の三つを掲げて取り組んできた。

## ②学校関係者評価委員、学校評議員の活用

保護者や地域住民の代表、学校評議員を「学校関係者評価委員」に委嘱し、協働型学校評価の重点目標に基づき、「子どもにとって何が必要なのか?」、「そのために、学校・家庭・地域が何をすべきなのか?」について率直な協議を重ねると共に、学校と家庭や地域との「橋渡し役」を担っていただいた。

また、学校関係者評価委員を兼ねる学校評議員については、「地域との連携」という観点から新田学区連合町内会代表、元気フィールド場長、新田児童館館長、元新田小学校父母教師会会長などに委嘱し、「過大規模校で学ぶ子どもたちの心」という観点から学習心理学を専門とする大学教授、宮城県教育委員会の臨床心理士、「子育て」という観点からは子育て支援関係の行政経験者に委嘱した。

## 4 「地域コミュニティ形成の場」である学校は、地域の課題をどうとらえ、家庭や地域と共にどんな活動に取り組んでいくか。

人口が約 16,000 名、世帯数が約 7,600 戸という新田地区において、地域の核はやはり新田小学校である。

そして、新田地区にあって地域住民が集まり、地域行事を実施したり、スポーツなどを通じて交流したりできる場所は新田小学校である。

過大規模校であっても、学校は「学校教育の充実」という本来の役割に加えて、こうした「地域コミュニティ形成の場」としての役割に寄せられる大きな期待にも応えていかなければならない。

「地域コミュニティ形成の場」である学校にまず求められることは、次の 2 点であると考える。

○保護者や地域住民が訪れやすい学校の雰囲気をつくること

○学校が地域の活動拠点となるよう、施設開放を進めること

また、新田学区連合町内会が掲げている「地域の課題」は、「高齢者と子どもにやさしい街づくり」、及び東日本大震災の経験から生じた「地域防災力の強化」である。

そこで、学校としては「地域の課題」をふまえた施設開放のあり方と、将来の街づくりの担い手となる子どもに「社会参画意識」を培い、自己肯定感を高める取り組みについて検討した。

### (1) 地域における生涯学習の場としての学校施設開放

#### ①地域交流室『新田ルーム』の開設

1,100 名以上の子どもの学校生活を保護者や地域住民がいつでも参観し、見守り、その中で気付いたことや意見を交換するスペースとして、地域交流室『新田ルーム』を開設した。施設開放登録団体の打ち合わせ、PTA 活動の会議、社会学級の研修、新田児童館のサテライト室などに利用されている。

さらに、開校 50 周年の関係資料の展示場所としても活用されており、地域住民が気軽に訪れている。

#### ②土曜日における図書室等開放事業の実施

「校庭が狭くて、子どもの運動量が少ない」、「人口の割に新田地区には公園が少ない」、「地域に安心して遊べる場所が少ない」などという、子どもの体力づくりや遊びの充実、居場所づくりについては学校・家庭・地域が共有する課題であった。

スポーツ少年団や地域の成人が主体のクラブなど、18 の団体が登録して校庭、体育館を使



用する従来型の施設開放は新校舎完成後に再開していたが、一般向けの開放はこれまでなされていなかった。

そこで、一般向けの開放として仙台市教育委員会の委託事業である『図書室等開放事業』<sup>11)</sup>を実施することとし、土曜日に学校の図書室と校庭を子どもや保護者は勿論、地域住民に開放することとした。この事業は、子どもの居場所を拡大し、地域住民の生涯学習の場として学校施設を活用するものである。

図書室では、本の貸し出しや図書に関連するイベントなどが行われ、校庭では管理員を務める保護者などが子どもたちと球技や昔遊びを楽しんでいる。

「学校・家庭・地域の連携」の重要性を十分に理解していただき、保護者や地域住民が中心となって管理員を務め、本事業を展開している。長期休業期間中を除く年度30回程度の開放は、本校の子どもに限らず、高齢者や乳幼児も利用しており好評である。

また、保護者や地域からは読み終えた図書の提供なども多く、地域全体で学校施設を活用した本事業をより充実させようという雰囲気も高まっている。

## (2) 地域の人、こと、ものとかかわりを重視した活動の展開

### ①新田地区の子どもたちに身に付けさせたい力

東日本大震災以降、各地域や学校で実情に応じた防災教育が展開されると共に、「自助・共助・公助」の流れの中で「共助」の要となる地域コミュニティの重要性が再認識されている。

また、被災地においては、震災からの「復興の担い手」、これからの「街づくりの担い手」となる子どもたちへの期待が高まっている。

このことは、新田地区における地域課題にも通じるものであり、子どもたちには「防災に関する力」と「街づくりにかかわろうとする力」を身に付け、高めさせたいと考える。

過大規模校の1,100名以上の子どもが、「防災に関する力」と「街づくりにかかわろうとする力」を身に付け、高めていくことは、地域にとって大きな活力となるものと考ええる。

### ②地域学習『新田学習』の展開

開校以来の校風、学校文化とも言える「新田の街に息づく学校」、「家庭や地域と手を携えて歩む学校」を大切に、子どもの「社会参画意識」を培うために、次の4つの柱からなる地域学習『新田学習』を実施した。

- |                                       |                                       |
|---------------------------------------|---------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 新田の街で体験する・浸る | <input type="checkbox"/> 新田の街を知る・伝える  |
| <input type="checkbox"/> 新田の街のために行動する | <input type="checkbox"/> 新田の街の人と未来を描く |

本校の全教育活動を対象として、地域の人、こと、ものを学び（あるいはそれらを通して学び）、新田の街に愛着と共感をもつこと、折々の地域行事に参加・参画すること、「新田をこんな街にしたい!」という提案する力を高めることをねらったものである。

また、この街に生きる様々な人々（地域住民、幼稚園児、高齢者等）との交流を通じて、人とかかわる力を身に付けさせることもねらいとしている。

さらに、この街に生きる人々とその営みに憧れを抱き、温かみにふれることを通してその生き方・あり方を学び、自身の心を耕し続けながら、「自己肯定感」の豊かな子どもに育ててほしいと願い、展開している地域学習である。

例えば、子どもたちは地域の協力を得ながら、次のような活動を行っている。

#### ○2年生 生活科

学区内の約30の商店や施設などの協力を得て、「街探検」を実施している。地域の人

たちとのかかわりを通じてその営みを知り、子どもが地域への愛着をもつ第一歩となっている。

#### ○3年生 社会科及び総合的な学習の時間

新田小学校の開校前から学区に生活する高齢者や、地域の歴史や地元学に詳しい地域住民の協力を得て、新田に残る史跡や昔を伝えるものなどを見学し、新田の街の魅力を歴史的な側面から見つめ直す機会としている。

#### ○5年生 社会科及び総合的な学習の時間

新田地区で活動する農事研究会の協力を得て、学校近くに借りた田んぼで米作りを体験している。社会科「日本の農業」の学習を深めたり、稲作に携わる新田の人々の営みに学び、共感したりする機会となっている。

#### ○4～6年生 クラブ活動

「ゲートボールクラブ」は、地域の新田公園で、地域の高齢者で組織するゲートボール協会と一緒に活動している。

また、「新田幸セクラブ」は、新田学区連合町内会などの協力を得て、地域課題である「高齢者と子どもにやさしい街づくり」について体験を通して学んでいる。地域の幼稚園を訪れたり、民生委員児童委員と意見交換を行ったりすることなどを通して、新田の街のこれからについて考えを深めるきっかけとしている。

#### ○5、6年生 委員会活動<sup>12)</sup>

「マナーアップ委員会」は、『協働型学校評価』の重点目標の一つである「あいさつ」に学校・家庭・地域が一体となって取り組む際に活動の中心となっている。

#### ○5年生 『NETS新田』の活動

土曜日における「図書室等開放事業」の取り組みから、5年生が中心となった『NETS新田』という活動も生まれた。NETSには、子どもたちの発案で、N（にこにこ）、E（笑顔で）、T（助け合う）、S（新田の子たち）という意味が込められている。

仙台市宮城野区中央市民センター、東部市民センター、新田学区連合町内会の支援を受け、土曜開放の『スポーツ祭り』の企画・運営、町内盆踊り大会に向けた『七夕飾りづくり』、地域の支援団体が高齢者に届ける弁当に手作りの『メッセージカード』を書き添える活動、新田の街の魅力を伝える『新聞・マップづくり』、『石巻・仙台子ども活動交流会』への参加などの活動に取り組んできた。

そして、活動から自分が考えたこと、学んだこと、提案したいことを地元新聞の読者欄に投稿し、『街づくり』について考えを深めている。

このように、『新田学習』の展開は、学校と地域が思いを共有できる機会や場となっている。

この『新田学習』は、教育課程の改善とそれに伴う学習指導要領の改訂に関するキーワードである「社会に開かれた教育課程」を新田小学校がこれから具現化していく際に、大きな柱となる活動であると考えている。

#### ③地域と創る行事

仮校舎の時期の2年間を除き、地区民運動会や夏祭りなどは校庭を会場に行ってきた。他にも、地域では新田コミュニティセンター祭、新田児童館祭、新田地区体育振興会主催行事をはじめ、様々な行事が活発に行われている。学校・家庭・地域が行事を創り、その行事を通じてつながるという「地域の強み」である。学校としても子どもに参加を呼びかけるなど、積極的



な協力と支援を続けてきている。

また、東日本大震災を教訓に防災教育の充実が求められていることから、地域課題である「地域防災力の強化」の一環として「新田地区総合防災訓練」が学校を会場に地域行事として実施されている。

学校も「新田地区総合防災訓練」を地域と共催する学校行事として位置付け、計画段階からその内容を新田学区連合町内会と相談するなどした。保護者も参加する行事として、防災に関する授業を参観したり、親子で防災訓練に参加したりすることとした。

さらに、学区内をコースとして10年ほど前まで実施していた「持久走大会」を復活した。車の交通量増加に伴い中止となった行事であるが、元気フィールド仙台の散策路にコースを設定し、保護者や地域住民の協力を得て、子どもの安全を確保しながら実施し、子どもたちに参加の喜びを味わわせている。

「持久走大会」復活のきっかけは、「運動会の徒競走は、子どもが多過ぎる上に、外野の広い芝生の上を走る我が子の姿は外野スタンドの保護者席から見えない」、「親の声援が届かず、子どもは満足感を味わえていない」という、保護者の声が寄せられたことにある。「持久走大会」の場合は、子どもが自分の記録に挑み、それを保護者や地域住民が見守り、子ども一人一人に声援を送ることができる。子どもは勿論、保護者や地域住民の行事への参加意識を高め、かわりを深める「持久走大会」となっている。

## 5 地域の団体や関係機関との連携をどのように進めていくか。

新田小学校父母教師会や新田学区連合町内会との連携は元より、仙台市立東仙台中学校<sup>13)</sup>、新田児童館<sup>14)</sup>、学区内の幼稚園・保育所、民生委員児童委員連絡協議会などとも子どもに関する情報と認識の共有と共に、「顔の見える関係づくり」に努めた。

### (1) 新田小学校父母教師会との連携

#### ①毎朝の旗当番と夏季休業中のプール開放

学校周辺の道路が狭かったり、曲がりくねっていたりしている上に、交通量が多いという交通安全上の課題を受け、通学路の要所8か所に毎朝保護者が交替で「旗当番」として立ち、子どもが安全に通学できるよう見守っている。これは、開校以来、1日も欠かさずに父母教師会が取り組んできていることである。

また、1,100名以上の子どもの夏季休業中の「居場所づくり」の一環として、父母教師会が管理・運営に当たる「夏季休業プール開放」を本校のプールを会場として20日間程度実施している。

いずれも、父母教師会が子どもたちのために学校と連携して取り組み続けている活動である。

#### ②『親父の会』の活動

父母教師会の内部組織として位置付けられている『親父の会』は、父親が学校やPTA活動、地域に対して関心を高めることをねらって活動している。

校庭土曜開放の管理・運営に当たったり、学校行事の準備・運営などに協力したりしている。本校の子どもに体験させたい講座を夏季休業中に開設し、メンバーの仕事との関連から、「地下鉄東西線車両基地見学会」や「電気の旅～発電所からコンセントまで～」なども実施した。

## （２）新田学区連合町内会との連携

### ① 11 番目の町内会としての学校

新田学区連合町内会は、学区内の 10 町内会で組織されている。「家庭や地域と共に歩む学校づくり」を進める上で、連合町内会との連携は不可欠である。

そこで、「地域の中の学校」ということをご理解いただき、新田小学校を 11 番目の町内会として位置付けていただいた。

校長は月 1 回の町内会長会にオブザーバーで参加し、町内の動きを把握したり、学校の状況を伝えたりする機会とし、学校と地域の相互理解に努めてきている。

### ②新田学区連合町内会の各組織との連携

連合町内会の内部組織である新田学区体育振興会、新田コミュニティセンター、社会福祉協議会などとの連携も積極的に行った。

## （３）新田児童館、保育所や幼稚園との連携

### ①新田児童館との連携

新田小学校と同様、新田児童館も仙台市で最も規模が大きい児童館である。利用児童は本校児童が大半であることから、生徒指導面や家庭との連携の面で積極的な情報共有、地域課題である「高齢者と子どもにやさしい街づくり」に関する認識の共有を図った。

また、利用児童が増加して児童館の施設だけでは手狭になったことから、学校内の多目的教室をサテライト室として開放した。仙台市初の「タイムシェア方式」である。

### ②東仙台中学校、学区内の保育所や幼稚園との連携

「中 1 ギャップ」への対応の意味から、新田小学校の約 9 割の子どもが進学する仙台市立東仙台中学校との連携を深めた。

また、「小一プロブレム」への対応の意味から、保育所や幼稚園と教職員の積極的な交流、園児の学校見学、「スタートカリキュラム」や「接続カリキュラム」に関する意見交換などを行った。

## むすびに

新田小学校は、平成 34（2022）年には入学児童が 340 名を超え、全校児童数も 1,350 名前後となることを見込まれている。

しかし、仙台市教育委員会の『仙台市立小・中学校の一定規模確保に向けた方針及び過大規模校化への対応方針』においては、学校の分離の予定はなく、すでに校舎は 1,400 名の児童が収容できる規模で建設されている。

過大規模校としての学校経営は、「家庭や地域と共に歩む学校づくり」を目指して、地域課題もふまえながら、引き続き改善が図られなければならない。今後も、経営の視点として次の 4 点を考えていきたい。

### 1 校風を学校・家庭・地域で子どもと共に創り続けること

新田小学校は、平成 28（2016）年に開校 50 周年を迎えた。記念式典をはじめ、1 年を通じて地域住民と保護者が中心となって記念事業を展開した。その取り組みの様子からは、学校への期待と共に「地域の核は学校」であるという思いが強く伝わってきた。この「地域の核は学校」という思いは、正に「家庭や地域と共に歩む学校づくり」と軌を一にするものである。

家庭・地域との連携の中で教育活動が展開され、子どもが『学び甲斐』を、保護者や地域住民が『協力し甲斐』を感じるという校風をこれからも大切にしたい。

そのために、「目指す学校像・児童像」、地域課題を保護者や地域住民と常に共有することに今後も努めていく必要がある。

## 2 学校教育の地域化をさらに推進すること

学習指導要領の改訂の基本理念の一つに「社会に開かれた教育課程」が示されたことにより、学校・家庭・地域の連携は一層重要になってくる。学校は、「よりよい学校教育を通じて、よりよい社会を創る」という目標を家庭や地域と共有し、連携・協働しながら、子どもたちが「未来の創り手」となるために必要な資質・能力を育むことが求められてくる。

地域の教育資源や機能の体系化と活用、地域学習の観点からの教育内容・教育方法の見直し、地域ぐるみの学校行事の検討、地域ぐるみの生徒指導の充実、地域全体で子どもの自己肯定感を高めることなどに、今後も取り組んでいく必要がある。

また、「家庭や地域と共に歩む学校づくり」は「開かれた学校」につながるものであるが、その要素とも言うべき「説明責任と情報公開」・「外部の声の反映」・「地域の教育資源と機能の活用」・「学校施設の開放」・「学校機能の開放」などの点からも、学校・家庭・地域の連携のあり方をさらに検討していきたい。

## 3 「学校を内に開く」こと

「家庭や地域と共に歩む学校づくり」は、いわゆる「開かれた学校づくり」、「学校を外に開く」ことに主眼が置かれがちである。

しかし同時に、過大規模校にあっては、教職員数も多いことから「学校を内に開く」ということも重視したい。これまでも言われてきた、

- (1) 考え方の枠組みを開く (2) 教室の壁を開く (3) 授業の枠組みを開く
- (4) 教師と教師の間の壁を開く (5) 教師と子どもの心を開く

ということである。このことから、希薄になりがちな過大規模校における教職員の組織への所属感を高めること、学年経営の活性化、そして学校経営参画意識の高まりが期待できるからである。

そして、過大規模校であるからこそ求められる「チームとしての学校」を「チーム医療」的な発想で、役割をシェアするという発想で展開していくことができるものと考えている。

## 4 校長は「スクールリーダー」であると同時に「教育者」であること

子どもが校長を慕い、教職員が校長を支持し、保護者や地域住民が校長に信頼を寄せて「地域の核である学校」を託すのは、「スクールリーダー」としての校長だけではなく、「教育者」としての校長でもある。

校長は常に、「スクールリーダー」であると同時に、「教育者」として子ども、教職員、保護者や地域住民と共に歩み続けているかという自省と確認が必要であると考えている。

このことが、「子どもあってこそその学校」を創り、子どもが『学び甲斐』を、教職員が『働き甲斐』を、そして保護者や地域住民が『協力し甲斐』を感じる学校であり続けるための校長の大切な役割であると考えている。

## 参考資料

- 1) 平成 19・20 (2007・2008) 年度 栗原市立鳥矢崎小学校『学校要覧』・『教育計画』
- 2) 『栗原市立鳥矢崎小学校閉校記念誌』(平成 25 年 3 月発行 栗原市教育委員会)
- 3) 平成 26～28 (2014～2016) 年度 仙台市立新田小学校『学校要覧』・『教育計画』
- 4) 一定規模確保に向けた方針及び過大規模校化への対応方針  
<http://www.city.sendai.jp/tekiseka/kurashi/manabu/kyoiku/inkai/kanren/hoshin/index.html>
- 5) 『仙台市立新田小学校開校 50 周年記念誌』  
(平成 28 年 10 月発行 仙台市立新田小学校開校 50 周年記念事業実行委員会)
- 6) 仙台市新田東総合運動場  
<http://www.spf-sendai.jp/genki/>
- 7) クラブ活動  
文部科学省 小学校学習指導要領解説特別活動編(平成 20 年 8 月) p76～87
- 8) 仙台市立新田小学校ホームページ  
<http://www.sendai-c.ed.jp/~sinden/>
- 9) 平成 26～28 (2014～2016) 年度 仙台市立新田小学校 学校だより『新田の子』
- 10) 協働型学校評価  
<http://www.sendai-c.ed.jp/~sidouka/hyoka/index.html>
- 11) 学校図書室等開放  
<http://www.city.sendai.jp/shogaigakushu/kurashi/manabu/kyoiku/inkai/joho/kaiho/toshoshitsu/index.html>
- 12) 委員会活動  
文部科学省 小学校学習指導要領解説特別活動編(平成 20 年 8 月) p64～75
- 13) 仙台市立東仙台中学校  
<http://www.sendai-c.ed.jp/~tousen/index2.html>
- 14) 仙台市新田児童館  
<http://senmori.org/shinden/>